

## 名もなき者たちのちから

### 「彫刻刀が刻む戦後日本——2つの民衆版画運動」

町田市立国際版画美術館 2022年4月23日-7月3日

栗田秀法

美術館業界に足を踏み入れて30年も過ぎてくると、展覧会に足を運んでも、いささか寂しいことだが、感動こそあれ、名状しがたい体験に出くわすことは減多になくなっていく。そんな中で脳内のマッピングが機能不全に陥るような不思議な感覚に襲われたのは、「みる誕生 鴻池朋子展」(静岡県立美術館 2022年11月3日-2023年1月9日)でのある経験である。展示室に足を踏み入れると、展示ケースの中には大小さまざまな絵がどちらかと言えば雑然とかなり密に掛けられていた。いくつかの作品は見覚えのある県立美術館の名品だが、その脇には決して上手いとは言えない作品が配置され、ところどころに動物の糞がオブジェ然と配されてさえいるのである。おまけにキャプションはケースの床に置かれているので、通常の横からの鑑賞では誰の作品かも判然としない。2015年の神奈川県民ホールギャラリーでの個展「根源的暴力」の記憶が強烈で、同様な展示を期待し、ろくに予習もせずに出かけたことも原因なのだが、茫然自失とはこのことかと思っただけである。

急ぎ館内の解説を読んで理解できたのだが、美術館所蔵品と並置されていたのは、国立ハンセン病療養所・菊池恵楓園の絵画クラブ「金陽会」の作品であり、展示ケース外のところどころに掲出されていたのは、ある話者から物語を作家が聞き取って下絵を作成し、その下絵に基づき話者が思い思いのランチョンマットを作成するという「物語るテーブルランナー」プロジェクトの成果物であることがわかった。「金陽会」の作品には美術館所蔵品と遜色ないようなものもあり、作者名がすぐにはわからない形で展示されているため予想が当たらなかったのはご愛敬だが、展示の意図を多少とも理解してからは生命感があふれる素朴なプリミティブな作品の魅力にも反応できるようになっていた。おそらく脳みそがショートしかけたのは美術館の壁に行儀良く並べられる作品は、美術史上の一定の位置づけや価値づけを経た作家のものであるはずだという固定観念が揺らいだからなのであろう<sup>1</sup>。

「彫刻刀が刻む戦後日本」展のレビューの冒頭にやや唐突に鴻池展の感想を持ってきたのは、いわば名もなき者たちのちからのインパクト、美術館を取り巻くある種の制度性に関して共通する思いを抱いたからである。

本展では戦後の2つの民衆版画運動、具体的には日本版画運動協会(1949年結成)と日本教育版画協会(1951年設立)をめぐる様々な活動が詳細に紹介されたが、圧倒されたのは、後者の運動の広がり、紹介のセクションに充てられた企画展示室2において、棟方志功の大型作品よろしく展示室の壁いっぱいを埋め尽くした、全国の小中学校で共同制作された最終章の19の大型作品(1957年-1999年)である。指導者の名前はあれども、当然ながら制作者の手を分けることなどできようもなく、個々の制作者の名がクローズアップされることもない。思えばとりわけ近世以降を扱う美術史学では作者性の探求が重んじられてきた。教育版画協会の影響下で生まれた名もなき子供たちの共同制作による作品が、関連資料でも添え物でもなく作品として前景化し、強烈な個性を具えた版画運動協会の面々の作品と同等に展示されたことの意味は大きい。作家性を重んじる既存の美術史学の上に成り立った美術館が収蔵や展示に当たって何を排除してきたのかも考えさせてくれる。他方、美術活動の裾野の拡がりすべてについての作品やアーカイブを残すことができる



6章展示風景

わけもなく(残しておけば100年後には価値が見いだされることは必定とは言え)、その都度一定の価値判断による腑分けを強いられる運命にあるという大きなジレンマが存している。

さて展覧会は、次の6章から構成され、約400の作品や資料が陳列された。

- 1章 中国木刻のインパクト 1947-
- 2章 戦後版画運動 時代に即応する美術 1949-
- 3章 教育版画運動と『生活版画』1951-
- 4章 ローカルへ グローバルへ 版画がつなぐネットワーク
- 5章 ライフワークと表現の追求
- 6章 教育版画運動の開花 1950年代-90年代

1-2章、4-5章に登場する版画家の多くは、木版画の歴史をたどる展覧会ではほとんど取り上げられてこなかったものの<sup>2</sup>、労働運動、農民運動、平和運動の関連では多かれ少なかれ取り上げられてきた作家である。「戦後日本のリアリズム 1945-1960」展(名古屋市美術館、1998年)では、北岡文雄、滝平二郎、飯野農夫也、新居広治、上野誠、小口一郎、鈴木賢二、儀間比呂志の木版画が紹介され、本展でも何らかの形で全員が取り上げられている。鈴木賢二、新居広治、小口一郎、飯野農夫也、滝平二郎を中心とする北関東の木版画運動については、「野に叫ぶ人々 北関東の戦後版画運動」展(栃木県立美術館、2000年)においてまとめて紹介された。また、1930年代に魯迅が提唱し、抗日運動の中で広がった中国木刻運動と戦後日本への波及については「闇に刻む光 アジアの木版画運動 1930s-2010s」(福岡アジア美術館/アーツ前橋、2018-2019年)で大きくクローズアップされたことは記憶に新しい。



2章展示風景

とりわけ注目されたのは、第4章でなされた、日本版画運動協会と関連したものを中心とする、全国で展開された版画サークル活動の全貌の機関誌の紹介である。このセクションに関する調査の中間報告が2019年のミニ企画展「彫刻刀で刻む社会と暮らし—戦後版画運動の拡がり」で既に行われており、本展担当学芸員の町村悠香を含む「戦後版画運動機関誌を読む会」(2018年-)の活動と並行して、本展が中期的な調査研究活動を経て開催されたことがわかる。調査活動の成果は図録82-83頁の「彫刻刀が繋ぐ戦後日本の青春—中国木刻普及と版画サークル1947-56」と題されたマップにまとめられており、19都道府県で展開された版画サークルの活動が手に取るように理解できるようになっている。一口に版画サークルと言っても、地域サークル、職場サークル、学校サークル等の種別があることも明記されている。また5章では、数少ない女性版画家として小林喜巳子の活動がまとまって紹介されたことも注目されよう。



4章展示風景

全国各地に広まった版画サークルの動きは1948年にはじまった「うたごえ運動」の隆盛と比較できるものであったが、ほぼ時を同じくして様々な分野での民間教育運動が起きていた<sup>3</sup>。その中で本展が目にしたのが1951年に大田耕士によって創設された日本教育版画協会の活動で、第3章でまとめて紹介されている。無著成恭による「生活綴り方」再興に触発された「生活版画」が提唱され、教育版画運動は全国に展開し、版画運動協会のメンバーにも感化を与えた。静岡市の教員・蒔田晋治の指導下で才能を開花させた海野光弘の中学生時代の仕事もこの章で多数展示されており、目を引いた。

最後のセクションは教育版画運動の広がりにも充てられている。教育版画運動の展開に拍車がかかったのは、

1953年に始まり1964年まで続いた読売新聞社主催「全国小・中学校版画コンクール」が果たした役割が大きいのだという。なお、活発な教育版画運動の成果であろう、1958年の学習指導要領の改訂では「版画をつくる」という項目が加わったことも教育版画の発展に大きく寄与したとみられる<sup>4</sup>。会場で上映されていた「たのしい版画」「紙でつくる版画」「木版画のつくり方」「たのしい共同製作」という4本の教育映画は、当時の様子を伺い知るうえで大変興味深いものであった。圧巻だったのは、全国各地から大田耕士のもとに集まった版画文集の物量で、現存する500冊以上の中から選ばれた82件の陳列からは当時の運動の熱量の大きさが存分に伝わった。冒頭で触れた19の作品は教育版画協会が実施した「日本教育版画コンクール」(1965-94年)の受賞作を中心とした大型作品や版画絵巻で、その掉尾を1999年の「キッズゲルニカ・プロジェクト」の作品が飾った。

展示と共に評価されるべきは資料性の高い図録で、町村学芸員の長文の論考「『生活を、もっと生活を』戦後版画運動・教育版画運動から再考する戦後リアリズム美術の系譜」が展示内容を強化・補足し、再録された『形象』誌のプロレタリア美術運動史資料対談が、極めて詳細な年譜や文献表と共に、さらなる考察への材料を提供している。美術史、版画史、文化史、美術教育史等他分野にまたがる本展は各所に大きな反響を呼んだようで、様々な立場からいくつかの優れたレビューが書かれたことに加え、本展の企画および図録内の論文に対して担当の町村学芸員に第33回倫雅美術奨励賞が贈られた。

本レビューで改めて強調しておきたいのは、本展が高い評判を得たのは、やはり、名もなき子供たちが手掛けた19の集団制作による大型作品群の放つインパクトの衝撃に拠るところが大きいのではないかということである。集団制作作品への関心の増大に関連していえば、「『写真の都』物語 —名古屋写真運動史:1911-1972—」(名古屋市美術館、2021年)でも「(中部学生写真連盟)—集団と個人、写真を巡る青春の摸索」というセクションが設けられていたことは注目に値する。美術史や美術館の在り方に現場レベルでも緩やかな地殻変動が起きているのであろうか。町村学芸員の新しい試みが氏の「文化資源学」のバックグラウンドとどの程度関わっているのかはともかく、少なくとも「美術品や文化財と社会との関係を広く論ずる」(木下直之)文化資源学的な発想の展示や研究への傾きが大きくなりつつあることを強く感じた展覧会でもあった。

1 | なお、ここで触れた展示は展覧会場の四分の一程に過ぎず、展覧会全体として作家の意図はもっと別のところにある。

2 | 例えば「木版画—明治末から現代—」展(練馬区立美術館、1998年)では、北岡文雄のみ。

3 | 日本綴り方の会(1950)、教育科学研究会(1952)、創造美術協会(1952)、日本教育版画協会(1951)、日本文学協会(国語教育部会。1951)、産業教育研究連盟(1953)、科学教育研究協議会(1954)など(『ニッポニカ』による)。

4 | 指導要領改訂を機に出版された『新しい児童画の材料と技法(新しい児童画指導講座、1)』(国際学童美術研究会編、宝文館、1958年)では、「教育における版画の効用(座談会):久保貞次郎 棟方志功 北川民次」が掲載されるとともに、大田耕士は「いろいろな版画の導きかた」という版画の技法紹介の文章を寄せ、実作例として4名(海野光弘、大内隆邦、小池正夫、小林邦治)の子供たちの作品が掲載されていることを補足しておく。